

シュンペーターの資本主義衰退論

——空回りする経済・英雄的企業者と「社会化」——

中 村 隆 之

目次

はじめに

1 シュンペーターの資本主義衰退論

1.1 イノベーションの自動化

1.2 「社会化」の進行

1.3 「イノベーションの自動化」と「社会化の進行」の相互強化作用

2 資本主義衰退後の世界

2.1 イノベーションは止まり、経済は停滞する：悪しき「労働主義」の蔓延

2.2 イノベーションは続く：空回りする経済、あるいは社会主義文明の開花

3 残された問い

3.1 資本主義の偉大な成果：英雄的企業者と空回りする経済

3.2 「英雄ヴィジョン」と「組織化ヴィジョン」

4 シュンペーターの希望：協同原理＝ソフトな「社会化」

おわりに

はじめに

シュンペーター (Joseph A. Schumpeter 1883–1950) は、企業者によるイノベーションの遂行 (= 創造的破壊のプロセス)こそが資本主義の本質であると考えた。それは、長期的な観点から、資本主義の奥底にある動態的契機を捉える視点として、大いに注目されている。そのダイナミックな資本主義を強調したシュンペーターが、『資本主義・社会主義・民主主義』(1942)では、資本主義が衰退すると論じている。

「資本主義の非常な成功こそが、それを擁護している社会制度をくつがえし、かつ「不可避免的に」その存続を不可能ならしめ、その後継者として社会主義を強く志向するような事態を作り出す。」(Schumpeter [1942] 1950, p. 61: 訳(上) 114 ページ)

シュンペーターの議論を構成するパーツはそれほど多くなく、すでに多くの論文・著書で説明・評価されている¹⁾。だが、彼の議論は一筋縄ではいかない。そのパーツのそれぞれの意味付け、重みづけによって、幾通りもの解釈が可能だからである。そこで、まず、私なりの構成で、シュンペーターの資本主義衰退論を説明することから始めよう。

そして、彼の議論から二つの論点を引き出す。一つは、「空回りする経済」という視点である。シュンペーターは、イノベーションが自動化され、企業者による産業構造転換も起きない「空回りする経済」という未来像(一つの可能な未来像)を提示した。そこから、「企業者がいれば空回りしないのか?」という論点を考えてみる。

もう一つは、シュンペーターの「社会化」に対する評価と、彼の「英雄ヴィジョン」の関係である。「英雄ヴィジョン」と対照的な「組織化ヴィジョン」(マーシャル)は、ソフトな「社会化」と整合的であることを論じる。

そして、最後に、シュンペーターから、「社会化」「組織化」に対する皮肉的で、過度に悲観的・運命論的な態度、希望を語らない性格、「英雄ヴィジョン」に由来する偏りを取り除くならば、マーシャルと同様に、ソフトな「社会化」——倫理に基づく協同・信頼・富の付託——の方向が残ることを示す。

1 シュンペーターの資本主義衰退論

シュンペーターは、『経済発展の理論』(1912)において、慣行的な軌道を破

1) 主な文献として、Heertje ed. (1981), 塩野谷 (1983), Swedberg (1991a), ch.7, 伊東・根井 (1993), 155-62 ページ, 大野 (1994), 214-48 ページ, 金指 (1996), 第3・4・5章, 八木 (2001), McCraw (2007), ch.21, Andersen (2009), ch.7 など。

り、「新結合（イノベーション）」を成し遂げる企業者を称えた²⁾。英雄的な企業者が偉大な第一歩を踏み出したことにより、世界が塗り替えられ、質・量ともに過去とは格段に違う消費内容を、広く一般の人々までもが享受できるようになったのだ。だから、資本主義経済における主役は「企業者」である。企業者は、未知の領域に踏み込み、過去とは違う世界を創造する非凡な人間である。状況の変化に適応している大多数の人々は、脇役に過ぎない。「一握りの英雄こそが、世界を塗り替える」というのが、シュンペーターの基本ヴィジョン——以下では「英雄ヴィジョン」と呼ぶ——である。

シュンペーターの長期傾向分析である資本主義衰退論は、まさに彼のヴィジョンの必然として現れたものである³⁾。「企業者こそ資本主義の本質なり。ゆえに、企業者なき世界は資本主義に非ず」ということだ。では、企業者なき世界は、いかにして訪れるのか？ それは「イノベーションの自動化」と「社会化の進行」の相互強化作用によってもたらされる⁴⁾。

1.1 イノベーションの自動化

かつて、多数の企業が競争している時代において、「イノベーション」は例外的・特別なことであった。多数に支配的な事業のやり方（常識・慣行）を、全体から見れば小さな企業が否定し、新しいやり方を打ち立てなければならないからである。自分の財産をすべてなげうつ覚悟が必要であり、さらに借金をす

2) 「新結合」とは、新しい財の生産、新しい生産方法の導入、新しい販路の開拓、新しい原材料・半製品の供給源の獲得、新しい組織の実現である（Schumpeter [1912] 1926, SS.100-101: 訳182-3ページ）。シュンペーターは、後にこれを「イノベーション」と呼ぶようになる。『景気循環論』（1939）では、イノベーションをシンプルに「新しい生産関数を打ち立てること」と定義している（Schumpeter 1939, I, p.87: 訳I 126ページ）。

3) シュンペーターの資本主義衰退論は、『資本主義・社会主義・民主主義』（1942）で論じられている。シュムペーター（1977）、Schumpeter（1991）、シュンペーター（2001）の諸論文も参照せよ。

4) Schumpeter [1942] 1950, 第二部「資本主義は生き延びうるか」。「資本主義は生き延びることができるか？ 否、できるとは思わない」という印象的なプロローグから始まる第二部は、資本主義の成功——強い経済成長や独占のイノベーション促進効果——を述べた後に、第12章「くずれ落ちる城壁」以下で、資本主義衰退論を展開する。

る必要もあろう。そこには、人生のすべてをかけて飛躍する、企業者の英雄的・天才的な決断がある。

ところが、多数の企業間で競争が働く「競争的資本主義」は、大規模生産が有利であるという技術的必然性によって、独占性の強い「トラスト化された資本主義」へと変化する。「トラスト化された資本主義」において、大企業は、独占的な事業環境を活かし、イノベーションを自動化する⁵⁾。毎年多額の研究開発費を投じて、技術革新を例外的・単発的な現象ではなく、恒常的な現象へと変える。独占が、多額の資金投下を可能と、またその回収を可能とするのである。技術革新だけでなく、商品に新しい装いを付加し、広告宣伝活動によって売り込むという方法も、大企業においては、何ら新しいことではない。つまり、独占的な大企業において、イノベーションは、ある程度計算可能なルーチン業務になるのである。

「トラスト化された資本主義」は、イノベーションを大企業内に自動化することによって、経済成長率という観点から、「競争的資本主義」よりも優れたパフォーマンスを達成する。だが、それは同時に、冒険的・英雄的な個人としての企業者を無用にする。大企業は雇われ経営者によって動かされる。「イノベーション」の資金は、企業内の予算であり、「イノベーション」自体は、企業内のテクノクラートの自動推進力で進む。命を懸けた渾身の飛躍など、どこにもない。多額のカネを支配する「個人」は要らない。すべては官僚的組織における管理された仕事の一部である。こうして、「トラスト化された資本主義」は、その経済成長上の大成功の傍ら、企業者なき世界を作り出し、資本主義の本質を損ない始めるのである。

1.2 「社会化」の進行

資本主義衰退のもう一つのカギとなる「社会化の進行」について、資本主義

5) シュンペーターのアイデアは、「シュンペーター仮説」として実証的に研究されてきた。だが、野方(2005)によれば、「大企業の方が研究開発費の割合が高い」「独占的産業であるほどイノベーションが促進される」という仮説は、一般的な形では成立しないようである。技術革新に関しては、中小企業の貢献が思いのほか大きい。

に内在する「合理化」の傾向から見てみよう。

資本主義は、私有財産権と契約の自由という制度の下で、不平等な家族財産を認めてきた。財産・所得の著しい不平等は、資本家たちによってだけでなく、封建社会以来の伝統的支配者（貴族・大地主）の支持があってこそ、正当性を維持し続けることができるものである。伝統的支配者は、莫大な世襲財産によって富を支配するばかりでなく、政治・公的職業を支配し、伝統・学問・文化の担い手として強い影響力を持っている。彼らは、資本主義の支えである。彼らは、資本家の利益を政治の場で代弁してくれる。そして、「上位の者は偉い。だから、従わなければならない」という支配の構造を受け入れさせているのも、伝統的支配者たちの隠然たる力の産物である。

ところが、資本主義的な価値基準——価値はすべておカネであらわし、おカネを生まないものは無用であるという経済合理性——は、政治力と秩序づけにおいて資本主義を影から支えていた伝統的支配者たちを、不合理なものともみなす傾向がある。そもそも、資本主義は、その初発において、伝統的支配者が持つ封建的身分の支配力を破壊し、誰もが平等な市民とすることで、活躍の法制的基盤——経済的自由、身分の特権の廃止、私有財産権——を作ったのであった。かように、資本主義的合理性は、本当は資本主義を支えているものさえも、否定する傾向がある。

さて、大企業化が進み、企業者職能が無用化した「トラスト化された資本主義」において、「合理性」の矛先は、資本家そのものに向かう。「競争的資本主義」の時代には、企業者職能の担い手である資本家が有用であり、従って資本家が存在するための財産の不平等にも正当性があった。けれども、「トラスト化された資本主義」においては、イノベーションは自動化され、個人としての企業者（およびその候補者としての資本家）は必要なくなる。個人にカネの支配力を集中させる合理的な根拠がなくなるのである。

大企業化によって「所有と経営の分離」が進み、イノベーションが経営のルーチン業務になっているとすれば、所有者＝株主の出番はなくなる。財産の不平等も、私有財産権制度も、「合理性」の観点から疑問となる。株主の（私有財産

権者としての) 会社に対する主権は、絶対的なものではなくなる。資本は、株主利益のためではなく、労働者(テクノクラート)たちの利益に従って運営されるようになる。こうなると、資本の運営に社会的目的・公益性の観点を導入することが、容易になる。大企業は、公的なルールに従って運営されることになり、また公的な委員会を通じた調整や計画を受け入れることになるだろう。シュンペーターは、この長期的な流れを「社会化の進行」と捉えていた⁶⁾。バラバラの私企業から寡占的大企業へ、そして寡占的大企業の組織化へと進み、資本の目的は私利利潤から社会的利益へと変わっていくのである。時代の趨勢と未来を捉える彼の立場をよくあらわしている『租税国家の危機』(1918)の末尾を引用しよう。

「社会化された共同体の第一の前提は、資本主義がその任務を成し遂げ、資本が満ち足りており、企業者の頭脳によって徹底的に合理化された国民経済が存在することである。そのような場合にのみ、社会主義に伴い純経済的發展が緩やかになっても、落ち着いて見ていられる。社会主義では、純経済的發展にとらわれずに豊かな人生を送る自由があり、またお金が人を動かすのではなく、人が有用なものとしてお金を使いこなすのだから。しかし、この時期は、まだ来っていない。…」

しかし、その最後のときは来るだろう。経済発展と、それにともなう社会的共感の環の拡大によって、次第に私企業はその社会的意義を失っていくだろう。…社会は、私企業と租税国家を超えて進展する——戦争の結果と

6) シュンペーターは、「社会化」という言葉に、生産手段の国家による掌握と中央集権的な計画経済というハードな意味と、資本の活動を公共的な目的に向けるだけのソフトな意味の両方を持たせていた。そして、社会主義を、ハードな意味での社会化であると断言しながら、ソフトな意味での社会化についても「結局は同じことだから」と言って、付言した(例えば、Schumpeter 1920: 訳 98-106 ページ, Schumpeter [1942] 1950, pp. 167-9: 訳 (中) 302-4 ページ, pp. 415-6: 訳 (下) 789-90 ページ)。「社会化」に限らず、シュンペーターの議論の仕方には、読者を欺くようなレトリックが含まれている。「○○は可能である。ただし、条件として…が満たされれば」と述べる時、○○におよそ不可能なものを置いて議論を際立たせたり、条件としておよそ不可能なものを羅列することで「○○は不可能である」ことを示したりした。このレトリックのせいで、シュンペーターの真意はいつも謎であり、多義的な解釈が生み出されることとなった。これは、彼の欠点というより、魅力の一部である。

してではなく、それにもかかわらず、である。これもまた、确实である。」
(Schumpeter [1918] 1991, pp. 130-1: 訳 81-2 ページ, 傍点は原文イタリック)⁷⁾

「社会化」とは、人々の生活上の価値を守るため、資本を所有者＝株主の私的利益のために運営するという大原則を止めることを意味する。それは、第一に、資本の活動が公共の利益につながるように導くことである。それは、所有形態の問題ではない。誰が所有するかではなく、どのように運営されるかの問題だからである。第二に、資本の活動を支える労働者が、所有者＝株主利益のために犠牲にならない、ということである。生活を犠牲にする強制的な労働環境、あるいは会社都合の解雇などは、認められない。ここで、「合理性」の観点から「上位者に従う」という支配の構造が崩れていくことも、この流れを促進するだろう。株主はもちろんのこと、会社そのものも権威を失う。富は集中よりも平等へと流れる。かくして、「社会化」の進行は、資本の活動と成果の分配に対して、社会の利益の観点から枠をはめていくことになる。

1.3 「イノベーションの自動化」と「社会化の進行」の相互強化作用

「イノベーションの自動化」と「社会化の進行」は、相互に強化し合いながら、資本主義を衰退させる。このシュンペーターの予測は、「1 世紀といえども「短期」である」というような、超長期的なものである。表面上の変動とは別に、深いところでゆっくりと進む傾向を、シュンペーターは見抜こうとしているのだ⁸⁾。

超長期の予測の前では、コンドラチェフ循環 (50 年～60 年周期) すら、表面

7) 引用する訳文は、本論文の理解のため、原文 (ドイツ語の場合は英訳文) を参照のうえ、筆者 (中村) が日本語を一部修正している。以下の引用においても、同様である。

8) 吉尾 (2011) は、『景気循環論』における「生理過程」と「病理現象」の区別に着目し、超長期の資本主義進化論においても、両者を区別する必要があると述べる。資本主義衰退論を、資本主義の失敗や停滞といった一時的変動 (病理現象) と結びつけて論ずるのではなく、それを貫いて進行する文明的進化の過程 (生理過程) として理解すべきという主張である。この主張は、シュンペーターの資本主義衰退論を、後の述べる「労働主義」による失敗と結びつける解釈——間違っていないが——が一面に多いだけに、有益である。

上の変動ということになる。シュンペーターによれば、コンドラチェフの波は、イノベーションの軌道を作る大きな技術的枠組みの盛衰と関係している。だから、現代の産業技術文明と結びついた大企業化と、そこでのイノベーションの自動化も、組織化・制度化によって高パフォーマンスを見せた後に、うまくいかなくなる時期が来る。それを乗り越えるのは、大企業における自動化されたイノベーションではなく、新しいことをなす真の企業者であろう。そして、新しい技術的枠組みと、それに適合した組織化・制度化によって、再びコンドラチェフの波が始まるのである。「企業者」は簡単には不要にならない。

それでも、「社会化」の進行は、資本の活動と成果の分配に対して、社会の利益の観点から枠をはめていくので、産業構造の転換を達成する第一歩を踏み出す真のイノベーションは、出てくるのが難しくなる。かくして、質的転換が登場しない、自動化されたルーチンワークのシステムが出来上がる。この官僚的な大組織が完成に近づくと、「社会化」はより進展する。かくして、「イノベーションの自動化」と「社会化の進行」は、互いに強化し合いながら、企業者による真のイノベーションが生まれにくい世界を作り出す。これが、シュンペーターによる「資本主義衰退」の意味である。

2 資本主義衰退後の世界

資本主義が衰退した後の世界で、「自動化されたイノベーション」は続くのだろうか？ これは非常に重要な点だと思うが、シュンペーターの答えははっきりしない。私には、YesとNoの両方の答えを持っているように見える。

2.1 イノベーションは止まり、経済は停滞する：悪しき「労働主義」の蔓延

資本主義のなかで培われた合理性は、不平等も、上位者への服従も、経済変

同論文(174-5ページ、注2)は、さまざまな論者の資本主義衰退論の解釈を、二つに分類している。一つは、経済外の要因(過度の平等化)によって資本主義が停滞するというもの。もう一つは、経済外の要因に加えて、経済内でも失敗の原因があるとするものである(例えば、大企業化による組織的硬直性、企業者機能の低下によって、経済上のパフォーマンスが悪化するなど)。合わせて参照してほしい。

動によってもたらされる失業という苦難も、勤勉さと貯蓄によって子孫のために家族財産を増やす意志も、不合理なものとして否定する。これは、過度の平等化の要求として、硬直的な「大きな政府」につながるばかりでなく、個々人の勤労インセンティブを阻害する。さらに、会社が権威を失えば、そこに資金を集中し、自動化されたイノベーションを続けることも難しくなる（会社の資金は、高い賃金を求める労働者の要求によって、分配されるだろう）。かくして、自動化されたイノベーションは止まり、経済は停滞する。

シュンペーターは、労働者による過度の平等化の要求を「労働主義」と呼び、それは必ずや経済発展を妨害する、と考えていた⁹⁾。この点を重視する解釈は、最も分かりやすい。彼が、社会主義の到来を予見しつつも、それを嫌ったことに、整合的である¹⁰⁾。

2.2 イノベーションは続く：空回りする経済、あるいは社会主義文明の開花

自動化されたイノベーション自体は継続するけれども、その内容は豊かなものではない、という可能性もある。企業者の真のイノベーションは、消費内容を質的に転換し、意味のある生活の向上に寄与する。新しい何を供給するかは、消費者ニーズに基づくのではなく、生産者側のイニシアチブで決められる¹¹⁾。しかし、企業者のイノベーションは、生きたもの、血の通ったものである。そこには「実」がある。

一方、自動化されたイノベーションは、ある程度までは、意味のある新商品の流れを生むだろう。しかし、一定の限度を超えると、新しさを装った商品が次々と現れるばかりで、質的な転換が伴わなくなる。ここで産業構造を変える

9) Schumpeter [1942] 1950, p. 419: 訳 (下) 796 ページ。「人間の平等は、あらゆる信条のなかで最も馬鹿げたものである」(Schumpeter's Aphorism, Swedberg 1991a, p. 206)。シュンペーターは、資本主義を衰退させる要因として「資本主義に批判的な知識人階級の増大」を挙げている。彼らは、合理性の観点から不平等を批判するので、「労働主義」を強化する言説を形成するだろう。

10) 「ある予見をなすことは、決して予言した出来事の進行を願っていることを意味しない」(Schumpeter [1942] 1950, p. 61: 訳 (上) 114 ページ)。

11) Schumpeter [1912] 1926, S.100: 訳 181 ページ。

企業者の真のイノベーションが登場すればいいのだが、それが起きない¹²⁾。それでも、広告・宣伝によって消費の標準であることを教え込めば、商品は売れる。コストは回収され、次のイノベーションも行われる。だが、そこには「実」がない。ただ、おカネが空回りしているだけである。企業者はいない。あってもなくても同じの無意味な、機械的なイノベーションが続く。たとえ「労働主義」に侵されていないとしても、これは十分に「資本主義の死」であり、シュンペーターの嫌う未来であろう。

「社会化」によって、自動化されたイノベーションに命が吹き込まれることはないのだろうか？ 資本の活動が公共の利益につながるように導かれるならば、人々の生活の質を向上させるような、意味あるイノベーションになるかもしれない。自然環境を守り、真の人間の必要を満たし、芸術的な創造と享受を促進するように、すべての企業が総力を挙げてイノベーションを遂行する世界を想像しよう。資本＝企業組織の活動に、投資と回収の貨幣的な循環ばかりでなく、消費の洗練と創造の喜びという意味が付与された世界である。これこそ「社会化」の目指すところであり、真の社会主義者の理想である。

シュンペーターは、そのような社会主義を否定しない。社会主義は「文化的不確定性」を持ち、いかような形もとるうるのである¹³⁾。審美的・個性的かもしれないし、画一的・大衆的かもしれない。民主的かもしれないし、非民主的かもしれない¹⁴⁾。経済的能率が高いことも、可能性としてはある。だが、『資本主義・社会主義・民主主義』（1942）における彼の議論を読めば、表面上の社会主義への高い評価は、いかにも彼らしいレトリックであることに気付かない人はいない。

12) 一つのコンドラチェフ循環を形成するような技術軌道や蓄積の制度的システムが空回りするようになったとき、企業者によって新しい風が吹き込まれる必要がある、というのがシュンペーターから受け取るべき最大のメッセージであろう。それは、特に、日本の長期的な停滞について当てはまるように思われる。

13) Schumpeter [1942] 1950, pp. 170-1: 訳(中) 307-11 ページ。

14) 社会主義と民主主義は可能性としては、両立可能である、とシュンペーターは述べる。しかし、社会主義は、政治が決める領域が資本主義より広い。政治の領域が広いと、民主主義はうまく機能しないだろう、というのが本音である (Schumpeter [1942] 1950, p. 299: 訳(中) 562 ページ)。

シュンペーターの本音は、マックス・ヴェーバーに語った次の言葉に集約されているように思う。

「力によって機会の平等化を図ることで、何らかの形で平等な社会になることはないでしょう。ましてや、それで、人間的な自由が実現することはありません。そうした考えを持つ社会主義者たちは、決定的に間違っています。同様に、人格の展開はコミュニティの対極にあり、それは既得の不平等を厳格に維持しない限り不可能であると考える有産階級〔ロマン主義者〕の考え方も、誤りです。…〔社会主義者たちが目を向ける恵まれない人々も、ロマン主義者たちが守ろうとする特権階級も、実のところ真に光を当てるべき集団ではありません。今、光を当てられていない領域にこそ、真の社会の原動力があります。〕…しかし、その領域は、いまだ暗闇のなかです。暗闇のなかで、恐れと疑いが広がっています。反感といら立ちに満ち、先が見えず、恨みを抱いて生きる人間は、扇動者やカリスマ的指導者に、ついて行ってしまいます。だからこそ、経済学が、つまり個人を殺さないで多数を生かす技術が、今日、いまだかつて到達したことのない重要性を獲得するのです。」(ヴェーバーとの対話、1918年、Tritsch 1985, p. 169, 下線は中村)¹⁵⁾

事物の必然として資本主義は衰退する＝企業者の出番はなくなる。「個人を殺さないで、多数を生かす技術」は、きわめて難しいものになっていく。その不可能ともいえる課題に、シュンペーターは冷静すぎるほど冷静に、取り組まんとするのである。難しい課題であることを認識しないお気楽な社会主義者には、

15) シュンペーターとヴェーバーの対話は、記録されている限り、二回ある(おそらく1918年)。ヤスバース(Karl Jaspers)は、ウィーンのコーヒーハウスでの対話を、ケンカ別れのように伝えている。一方、シュンペーターと懇意のトリツェ(Walter Tritsch)が設定した会合は、火花が散るような議論とヴェーバーの長い独演の後、互いを認め合ったという。トリツェは、「シュンペーター自身の口から、このように明確にかつ断定的に、自分の立場を表明したのを聞いたことはあとにも先にも一度もなかった」と述べている(Tritsch 1985, p. 172, 大野 1994, 309 ページ)。本論で取り上げているのは、後者の会合である。
シュンペーターとヴェーバーの会合および両者の関係については、Tritsch (1985), 大野 (1994), 305-10 ページ, Swedberg (1991b), p. 45, p. 92, n.127 and n.129, 伊東・根井 (1993), 43-54 ページを参照。

どう考えても同調できない。それゆえに、彼の社会主義論は、すべてが皮肉に聞こえる。だが、それは自らの信条=ヴィジョン——生きた企業者こそが価値を創造する——に忠実に、真実を探求しているだけなのだ。

社会主義の真面目な探究者として、『経済発展の理論』（1912）第2章の末尾にも、注目しよう。

「この様式〔企業者を動かす三つの動機、すなわち私的帝国を建設する意志、勝利者意志、創造の喜び〕を、他のなんらかの社会的取り決めによって置き換えることは、容易ではない。しかし、そのようなものを探し求めるのは、決して不合理ではない。確かに、私的企業者を排除する社会組織においては、それにとって代わるものが求められなければならない。そればかりでなく、さらに、企業者が自分の利潤の大部分を消費せずに蓄積する際にはたす企業者の機能に、とって代わるものも見出さなければならないだろう。これは、実際問題としては困難なことであろうが、しかし、組織化の理念からは容易なことである。従って、経済生活において確認しうる無限に多様な動機について、またわれわれの種類の行動に対する動機の事実的重要性について、さらには異なった環境やおそらく異なった刺激の下でのこれらの動機の存続可能性について、詳細な現実的研究を行うことは、まじめに考慮さるべき「計画経済」および真面目に考慮さるべき社会主義の一つの根本問題である。」（Schumpeter [1912] 1926, S.139: 訳247-8ページ）

シュンペーターは、未来の社会主義が、労働主義や官僚的硬直性に陥ることなく、適切な動機を与えることで企業者機能を殺さないという可能性を、決して希望に基づかず、真面目に探求したのである。

3 残された問い

シュンペーターの資本主義衰退論=社会主義論から、われわれは何を引き出しようだろうか？ 私は、彼のヴィジョンの根幹にかかわる二つの問いが、残されると思う。一つは、英雄的な企業者がいれば資本主義は生きたものになり、偉大な成果を上げることができるというのは本当か、という問いである。換言すれば、英雄的な企業者のイノベーションでも、空回りする経済を生み出すの

ではないか、ということだ。

もう一つは、シュンペーターが、例外的・天才的な企業者にこだわり過ぎではないか、という点である。飛躍を成し遂げる英雄と、日常・慣行のなかにある平均人という二分法をとるがゆえに、必然的に「社会化」に否定的な結論に導かれているのではないだろうか？ 以下、それぞれの問いを検討しよう。

3.1 資本主義の偉大な成果：英雄的企業者と空回りする経済

シュンペーターは、資本主義において企業者のイノベーションがもたらした成果は偉大なものであることを強調する。1870年～1930年の総生産量の平均成長率は3.7%であった。機械化による投資割合の増大を差し引いて、消費量の平均成長率を見れば、少なくとも2%である。一つのコンドラチェフ循環(50年～60年)を通じて、平均すると年率2%で消費が拡大するということである。この成長が今後も続けば、50年後にはもっとも所得の低い階層ですら、貧困水準を脱するだろう。しかも、独占化・大企業化する資本主義は、かつてより速いペースで経済成長を遂げるに違いない。

この資本主義のエンジンは、大量生産によって、大衆の消費内容を充実させてきた。

「資本主義生産の代表的な業績は、安価な衣料、安価な綿布、人絹、靴、自動車等であるが、それらは概して、金持ちにとって重要な意味を持つ改良ではない。なるほどエリザベス女王は絹靴下をもってはいた。けれども、資本主義の業績は、女王たちのためにいっそう多くの絹靴下を提供することにあるのではない。そうではなく、必要労働量が着実に減っていくことで、絹靴下が女工たちの手の届くものになることこそ、資本主義の業績なのだ。」(Schumpeter [1942] 1950, p. 67: 訳(上) 124 ページ)

消費生活の充実など、安楽の増大に過ぎず、真の人間的な価値にはならないという意見もあろう。先にふれたヴェーバーとの対話で、シュンペーターはその点に触れている。

Weber「あなたは本当に、安楽が増大すれば人間はもっとよくなると思っ

ているのですか」

Schumpeter「断じてそうではありません。私たちは、個々人の社会的地位の上昇に伴う物質的な安楽の増大と、そのような社会的地位の変動（それは個人財産という制度だけが可能にする）そのものとを、混同しがちです。同様に、われわれは、全体の物質的な安楽がもたらす満足、よいことだと考えがちです—このためによく累進課税がとられます。しかし、その安楽による満足は、個人が地位の上昇を目指して、全身全霊をかけて努力することの価値とは、別のもののなのです。」

（ヴェーバーとの対話、1918年、Tritsch 1985, p. 169）

活動的に何かをつかみ取ることが「主」であり、その結果として実現する消費生活そのものは「従」である。これは確かに、たんに物質的な安楽を求めるよりも高貴な精神であるように見える。だが、結果としての消費内容が優れたもの、よい生活に結びつくものでなければ、活力だけが空回りすることを意味する。それで、いいのだろうか？

女工が絹靴下を買えるようになるのは、洗練された消費とまでは言えなくても、優れたよい生活の実現である。そこには、人生を豊かにする実質的な意味がある。しかし、規格化された量産品でよい生活を拡大することには、自ずと限界がある。差別化も起きるだろう、多様性も充実するだろう。しかし、ある一線を超えれば、イノベーションはよい生活の実現ではなく、「これが標準的なよい生活というものですよ」という生産者側からの押し付けとなり、それを追いかけていかなければよい生活をしていないかのような気分になる。

英雄的企業者の活力に満ちたイノベーションがある。消費内容は変化を遂げる。だが、そこにはお金の空回りしかない。洗練された消費はなく、それゆえに金儲けとは別の創造の喜びもない。物質的・経済的な豊かさが増せば増すほど、そういう世界に近づくのではないだろうか¹⁶⁾。

16) シュンペーターは、最もダイナミックな資本主義国であるアメリカに対し、その文化的・文明的な価値は高くないと考えていた。彼が、資本主義と文化的・文明的価値の矛盾に気づいていたことは間違いない。

3.2 「英雄ヴィジョン」と「組織化ヴィジョン」

シュンペーターの英雄的な企業者像は、「自然は飛躍せず」をモットーとするマーシャル (Alfred Marshall 1842-1924) と対照的である¹⁷⁾。

「経済発展 (economic evolution) は漸進的である。その進歩はときに政治的破局によって停止され、あるいは逆転されることがある。しかし、前進の動きは決して突発的ではない。なぜならそれは西欧世界においてさえも、また日本においてさえも、幾分かは意識的な、またいくぶんかは無意識的な習慣に基づいているからである。また天才的な一人の発明家、一人の組織者または一人の金融家によって、一民族の経済構造がほとんど一挙に修正されたかのように見えることがあるかもしれない。しかし、彼らの与えた影響のうち、たんに表面的で一時的な影響にとどまらない部分は、研究をさらに深めてみると、長い時間に準備されていた広範な建設的な動きを頂上に導くことをほとんど出ていないのを見出す。もっとも頻繁に起こり、綿密に観察でき、細部にわたって研究できる秩序だった自然の発現は、他の大多数の科学上の研究と同じように、経済研究の基礎である。他方で、気まぐれで、稀にしか起こらず、観察の困難な部分は、一般に後の段階における特殊な検討に委ねられる。それゆえ、自然は飛躍しない (*Natura non facit saltum*) という題銘は、経済学の基礎に関する書巻にとくに適切な題銘である。」(『経済学原理』第8版序文, Marshall [1890] 1920, p. xiii: 訳 ① 10 ページ, 下線は中村)

マーシャルの企業者は、孤高の英雄ではない。だが、日常的な業務をこなす凡人でもない。経営者として、自分の事業を取り巻く環境を調べ、変化に適応し、さらに新しい可能性の想像を無数に張り巡らせる。統率者として、従業員たちの能力・創造性・協力性を引き出し、活力ある企業組織を維持する。革新者として、技術知識の開発に努め、学習と模索を続ける。それが、マーシャルの企業者である。そこで強調されるのは「組織」である。活力ある企業組織も、刺激・学習・発見に満ちた産業組織も、集団として力を発揮する。1+1=2以上の結果をもたらす。

17) マーシャルとシュンペーターの対比については、根井 (1989)、第8章を参照。

例えば、新しい技術知識の芽を持った企業たちが、その応用可能性を求めてさまざまな模索をするとき、偶然に新しい結合可能性が開ける。これは、必死になって可能性を模索する企業がたくさんいてこそ、可能となる。集団は、単体を超える力を持ち、それこそが進化の原動力である。ある技術的な新結合を、一人の英雄的な企業者が独力で成し遂げたように見えるとしても、それは集団のなかの無数の模索の一つの結果に過ぎない。このマーシャルの革新の捉え方は、まさに、シュンペーターと真逆である。集団の力を強調するマーシャルは「組織化ヴィジョン」を持ち、シュンペーターは「英雄ヴィジョン」を持っていると言えよう。

マーシャルの唱えた「経済騎士道」は、彼の精神をよく反映している。目先の利益を追うのではなく、労働者に分配し、投資し、その能力を最大限引き出すような長期的視野を持つこと。独占や妨害によって利益を出すのではなく、真に社会のためになる財・サービスを供給するために、積極的に投資を行うこと——それが外部経済のネットワークを通じて技術革新～経済成長をもたらす。経済騎士道は、企業者に、厳しい経済合理性の制約の上に立ちつつも、富を追求することに、そして追求した富を支出することに、「公共的な精神」を求める。「高貴で、困難な事柄を、それが高貴で困難であるがゆえに行う喜びを見出す。…安価な勝利に対する軽蔑の念を含み、助けを必要とする人々を援助することを喜ぶ心を含んでいる」のである (Marshall [1907] 1966, pp. 330-1: 訳 139 ページ)。

シュンペーターは、マーシャルの倫理的でコツコツ型の企業者を、好きになれなかったようである。マーシャルの評伝のなかで、次のように述べている。

「マーシャルの教えは、ベンサム主義によって風味づけされた中期ヴィクトリア期の道徳の説教、魅惑も情熱もない中産階級の生き方からの説教である。そして、正直に言えば、それは私がもっとも嫌いなものである。」
(Schumpeter 1951, p. 104: 訳 149 ページ)

シュンペーターとマーシャルでは、「生きた人間」の範囲が異なる。マーシャルにおいて、活力ある企業組織の労働者も、日々コツコツと努力する経営者も、

みな生きている。けれども、シュンペーターの世界で生きているのは「生命の飛躍」をなす英雄的な企業者だけである。日常・慣行のなかにある凡人たちは、死んでいるのである¹⁸⁾。

この違いが「社会化」に対する評価に影響を及ぼす。マーシャルは、ソフトな形の「社会化」——資本の活動を公益に向けるような倫理的制約——を、活動性・積極性を増す要因と考えたであろう。公益に資する経営・投資活動を行っていることの確証があり、それが社会から倫理的にプラスに評価されるからである。だが、シュンペーターにとっては、そのようなソフトな「社会化」も、英雄的な企業者の創意を抑制する枠であり、管理強化の第一歩なのである。

シュンペーターは、資本主義衰退論(=大企業化と「社会化」の必然)において、バラバラの個よりも社会・組織・協同の力が重要になるという大きな流れを見抜いていた。この「社会化」「組織化」という方向性は、おそらく、マーシャルも、そしてマルクスも持っていた長期的な認識である¹⁹⁾。だが、「生きた人間たちの集合的な力」というものは、シュンペーターの「英雄ヴィジョン」に反する。だから、「社会化・組織化」の方向性に、極端なまでに懐疑的なのである——真剣に可能性を考えても、皮肉を弄んでも、結局のところダメという結論に行き着く。

4 シュンペーターの希望：協同原理=ソフトな「社会化」

シュンペーターは「社会化」について語るとき、ハードな「社会化」、つまり中央集権的な計画経済で代表させた。他のよりソフトな「社会化」については、どうせ同じこと——結局は死んだ世界にしかならない——だから考慮しない、という態度をよくとった。しかし、ソフトな「社会化」に類するものを肯定す

18) シュンペーターが極端なまでにエリート(英雄的企業者)を強調する点について、Andersen (2009) の第4章も参照。

19) 企業組織における労働者の協力と能力開発の必要性、共同で使う資本(インフラ・知識・人間能力)の増加、企業間の協力・調整の必要性が、資本の私有(バラバラの利益追求と意思決定)と矛盾するに至るという長期の認識(Marx 1867, SS.790-1: 訳③ 435-8 ページ)。

る発言も、数少ないながらある。その一つが、1945年の講演「現代の社会主義的傾向のもとでの私企業の将来」である²⁰⁾。

講演内容を要約しよう。私企業体制を批判する人々は、世の中を「階級闘争」のように、対立的に見る。これまでの私企業体制の現実を見れば、それは明らかに誤りである（労働者階級も生産力の順調な発展とともに、その成果を享受している）。本当は対立していないのに、対立しているように見るのは、リーダーシップをとるべき上位階級が、まとまりをもって統治を担う義務感・責任感がないからである。彼らは、勝手バラバラに自分の利益で行動するようになった。その原因は、個人的な利己主義こそが秩序の原理であるとする19世紀の「功利主義」哲学である。この個をバラバラにする哲学のせいで、社会が協調するための理念や、その理念を生きたものにするリーダーシップが、なくなってしまったのだ。

「この深刻な問題の解決は、権威的な国家主義——いろいろな形があるけれど、その最高形態はボルシェビズムである——から生まれるだろうか。全くダメだ。民主的な社会主義から生まれるだろうか。これもダメだ。教皇回勅 (*Quadragesimo Anno*) で提唱された意味での協同的組織 (corporate organization) に目を転じる必要があるだろう。教皇の道徳的な教えを賞賛することは、経済学者の役割ではない。しかし、経済学者は、教皇の教えから、経済学的な教義を引き出すことができる。この教義は、偽りの理論に基づくものではないし、実在しない人間性に基づくものでもない。この教義は、現代の経済のあらゆる事実を理解している。さらにそれは、現代のバラバラな状態への救いであるだけでなく、新しい枠組みのもとでの私的イニシアチブの機能を、われわれに示してくれる。協同原理は組織化するけれども、指揮命令をするわけではない。協同原理は、あらゆる中央集権的傾向・官僚的命令と対極にあるものである。そして、事実、その道こそが、中央集権・官僚化を阻止できる唯一の方法である。」(Schumpeter

20) Schumpeter ([1945] 1991). 1945年11月19日、モントリオールにおける、カトリック系の雇用者団体の会合で行われた講演の記録。この講演に関して Cramer & Leathers (1981), Swedberg (1991b), pp. 70-1, 八木 (2001), 26 ページを参照。

[1945] 1991, p. 404: 訳 325 ページ)²¹⁾

シュンペーターは、ここで「協同原理」に希望を託している。それば、バラバラな個から、共同の利益＝公益に向けての組織化である。つまり、倫理・精神レベルでの（当然、私的創意と両立する形での）ソフトな「社会化」と言ってもよい。

この「協同原理」を、実際にどのような組織で実行するかは、確かに重要な問題だ。だが、それ以上に重要なのは、「協同原理」が生きたものであり続けることである。集権化・官僚化の不可避な流れのなかで、それに対抗できるためには、その精神の息吹を保たなければならない。

「アソシエーションの協同主義 (corporatism of association) は、機械的なものではない。法の力で押し付けたり、生み出したりできるものではない。放っておいて実現するようなものでもない。自由人の行動、そして彼らの生気に満ちた信念によってのみ、生み出されうるのである。協同主義を確立し、成功に導くためには、意志、エネルギー、そして新らしい意味での社会的な責任感が必要である。手におえないほどの障害と、闘わなければならないだろう。ボルシェビキの独裁者がすでに世界の大部分を支配してしまった世界で、闘うようなものだ。しかし、すべては道徳的な改革の問題だ。経済的・社会的な問題である以上に、道徳的な問題であるという事実が、最大の問題である。それは、確かに大きな問題であるが、同時に栄えあることでもある。」(Ibid, p. 405: 訳 326 ページ)

このシュンペーターの提唱する生きた協同主義は、「生きた人間たちの集合的な

21) 「教皇回勅 (*Quadragesimo Anno*)」とは、1931 年のピウス 11 世の回勅。レオ 13 世の回勅 *Rerum Novarum* (1891) の「40 年後」という意味。関係のある部分を要約すると、以下の通りである。

財産権は自由のために必要であり、市場経済・イノベーターへの利益は、有用な成果をもたらす機能として承認する。しかし、財産権を、利己的に、他者を害するように使うことは許されない。一方、国家の権威によってあらゆる問題を解決しようとする社会主義は、認めることはできない。労使の対立を、カトリックの精神によって平和的な協調へと変え、新しい社会秩序を作っていくべきである。それには、道徳的な改革が必要である。

パチカン HP のピウス 11 世のページ (http://www.vatican.va/holy_father/pius_xi) を参照。

力」を表している²²⁾。すると、もはや、シュンペーターとマーシャルを隔てるものはない。シュンペーターから虚飾と「どうせ何をやってもダメ」という悲観を取り去り、マーシャルからベンサム主義的な狭量さを抜けば、両者は交わる。

おわりに

シュンペーターは、大企業化による「イノベーションの自動化」と、「社会化の進行」の相互強化作用により、真の企業家が現れなくなること——大きな産業構造の転換を起こし、コンドラチェフ循環の引き金を引く新しい動きがなくなる——により、超長期において（何度ものコンドラチェフ循環の後に）資本主義が衰退すると考えた。

彼の考える「資本主義の死」は、過度の平等化の要求に基づく「労働主義」の蔓延によって経済が停滞するハードなバージョンと、「労働主義」に侵されず、イノベーションが継続するソフトなバージョンがある。ハード・バージョンから見た悲観論は、彼の発言のなかで随所にみられるので、この解釈が主流である（特に1970年代の福祉国家の危機（「大きな政府」と機能不全の労働組合）に適用することもできた）。けれども、ソフト・バージョンから、無意味なイノベーションが継続する「空回りする経済」という概念を引き出すこともできる。また、皮肉におおわれて見えにくくなっているが、ソフト・バージョンと「社会化」の適切な組み合わせによって、来るべき「社会主義文明」について（極めて難しいと考えつつも）真面目に考察している。

シュンペーターの資本主義衰退論から、われわれが引き出しうる論点は、二つある。どちらも「英雄的な企業者こそが生きた人間であり、価値の創造者である」という「英雄ヴィジョン」の当否にかかわる。

22) ここでは corporatism を「協同主義」と訳した。「コーポラティズム」とすれば、マクロ的分配調整としての労使協調を意味するであろう。しかし、シュンペーターは分配に関する協調だけでなく、その基礎に倫理（カトリックの精神）を置いているので、あえて「協同主義」としたのである。そこには、労働者への分配に人間的・能力成長的な配慮があるだけでなく、資本への分配に、それが社会的に有用な方向へと投資されるように付託するという意味——倫理に基づく信頼と相互尊重——がある。

第一は、英雄的企業者がいても「空回りする経済」に陥ることはないのか、という論点である。企業者の活力ある行動が「主」で、結果としてもたらされる生活上の成果が「従」である限り、英雄的企業者がいても、人生を豊かにする実質的な意味がないようなイノベーションが続くかもしれない。特に、物質的・経済的な豊かさが増せば増すほど、その傾向は強まるだろう。

第二は、「英雄ヴィジョン」を持っているがゆえに、ソフトな形での「社会化」（資本の活動を公益性のある方向へと導く公的あるいは倫理的な制度化）をも認められなかったのではないか、という論点である。マーシャルは、「経済騎士道」の精神を持った倫理的でコツコツ型の企業者を想定し、活力ある企業組織と、刺激・学習・発見に満ちた産業組織を通じて、有機的成長が達成されると考えていた。バラバラの個よりも、集団・組織としての力が重要なのである。マーシャルの方向性は、ソフトな形での「社会化」と整合的である。しかし、「生きた人間たちの集合的な力」というものは、シュンペーターのヴィジョンに反するものである。ゆえに、ソフトな形での「社会化」でさえも、「死」に近づくものに見え、その行く末に否定的にならざるを得なかったのだろう。

われわれは、シュンペーターの貢献からも、あるいは現実の経験からも、革新的な企業者の存在が重要であることを知っている。だが、いかに冒険的・英雄的な企業者が重要だといっても、やはりそれは活気ある環境の結果として出てくるものなのではないだろうか？ だから、必要なのは、英雄的企業者が登場できるような、活気ある集団・組織である。それは、活気ある個が、各自のイニシアチブを活かしながら、互いに結びついている状態である。この結びつきが、つねに生きた精神に支えられているとき、それは、シュンペーターのいう「協同主義」の実現であろう。

「英雄ヴィジョン」を一面的に強調すれば、あらゆる組織化・協同性を否定的に見ることになる。だが、既にみたように、「英雄ヴィジョン」は「組織化ヴィジョン」に吸収される。悲観論に陥らず、人生を豊かにする実質的な価値を生み出す経済へと近づくためには、シュンペーターとマーシャルは統合されなければならない。

参考文献

- Andersen, E. S. 2009, *Schumpeter's Evolutionary Economics: A Theoretical, Historical and Statistical Analysis of the Engine of Capitalism*, Antehm Press.
- Cramer, D. L. and C. G. Leathers 1981, "Schumpeter's Corporatist Views: Links among His Social Theory, *Quadragesimo Anno*, and Moral Reform", *History of Political Economy* 13 (4), pp. 747-71.
- Heertje, A. ed. 1981, *Schumpeter's Vision: Capitalism, Socialism and Democracy after 40 Years*, Praeger: UK. (西部邁他訳『シュンペーターのビジョン』ホルト・サウンダース・ジャパン, 1983年)
- Marshall, A. [1907] 1966, "Social Possibilities of Economic Chivalry", *Economic Journal* 17, March, in A. C. Pigou ed., *Memorials of Alfred Marshall*, Augustus M. Kelley, pp. 323-46. (『経済騎士道の社会的可能性』永沢越郎訳『経済論文集』岩波ブックサービスセンター, 2000年, 128-92ページ)
- [1890] 1920, *Principles of Economics*, 8th ed., Macmillan. 『経済学原理』(①~④) 永沢越郎訳, 岩波ブックサービスセンター, 1985年。
- Marx, K. 1867, *Das Kapital*, Bd.1. (岡崎次郎訳『資本論』(①~④), 国民文庫, 1976年)
- McCraw, T. K. 2007, *Prophet of Innovation: Joseph Schumpeter and Creative Destruction*, Belknap Press of Harvard University Press. (八木紀一郎監訳『シュンペーター伝: 革新による経済発展の預言者の生涯』オーム社, 2010年)
- Schumpeter, J. A. [1912] 1926, *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, 2. Aufl., Dunker & Humboldt. (塩野谷祐一他訳『経済発展の理論』(上・下), 岩波文庫, 1977年)
- 1918, "Die Krise de Steuerstaats", *Zeifragen aus dem Gebiete der Soziologie* 4. English version, "The Crisis of the Tax State", in Schumpeter (1991), pp. 99-140. (木村元一他訳『租税国家の危機』岩波文庫, 1983年)
- 1920, "Sozialistische Möglichkeit von heute", *Archive fur Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 48, SS.305-60. (『今日における社会主義の可能性』シュムペーター (1977), 96-178ページ所収)
- 1939, *Business Cycle: A Theoretical, Historical and Statistical Analysis of the Capitalist Process*, 2 Vol., McGraw-Hill Books. (吉田昇三監修, 金融経済研究所訳『景気循環論—資本主義過程の理論的・歴史的・統計的分析』(全5冊) 有斐閣, 1958-64年)
- [1942] 1950, *Capitalism, Socialism and Democracy*, Harpe & Brothers. (中山伊知郎他訳『資本主義・社会主義・民主主義』(上・中・下), 東洋経済新報社, 1962年)
- [1945] 1991, "L'Avenir de L'entreprise privée devant les tendance socialistes modernes". In English, "The Future of Private Enterprise in the Face of Modern Socialistic Tendencies", in Schumpeter (1991), pp. 401-5. (『現代の社会主義的傾向のもとでの私企業の将来』シュンペーター (2001), 第11章, 321-7ページ所収)
- 1951, *Ten Great Economists, from Marx to Keynes*, Oxford University Press: New York. (中山伊知郎・東畑精一監訳『十大経済学者: マルクスからケインズまで』日本評論新社, 1952年)
- 1991, *The Economics and Sociology of Capitalism*, R. Swedberg ed., Princeton University Press.
- Swedberg R. 1991a, *Joseph A. Schumpeter: His Life and Work*, Polity Press.
- 1991b, "The Man and His Work", in Schumpeter (1991), pp. 3-99.
- Tritsch, W. 1985, "A Conversation between Joseph Schumpeter and Max Weber", *History of*

シュンペーターの資本主義衰退論

Sociology, Vol. 6, No. 1, Fall, pp. 167-72. (G. Schroeter translated from *Frankfurter Allgemeine Zeitung* 27 August, 1955)

伊東光晴・根井雅弘 1993『シュンペーター——孤高の経済学者——』岩波新書。

大野忠男 1994『自由・公正・市場』創文社。

金指基 1996『シュンペーター再考——経済システムと民主主義の新しい展開にむけて——』現代書館。

塩野谷祐一 1983「資本主義文明の衰退と社会主義」『シュンペーター再発見』（別冊経済セミナー），日本評論社，68-75 ページ所収。

シュンペーター 1977『今日における社会主義の可能性』大野忠男訳，創文社。

シュンペーター，J.A. 2001『資本主義は生きのびるか：経済社会学論集』八木紀一郎訳，名古屋大学出版会。

根井雅弘 1989『マーシャルからケインズへ：経済学における権威と反逆』名古屋大学出版会。

—— 2001『シュンペーター』講談社（講談社学術文庫，2006 年）。

野方宏 2005「イノベーション，企業および市場構造：シュンペーター仮説と最近の展開」『神戸市外国語大学外国語研究』第 62 巻，19-44 ページ。

八木紀一郎 2001「解説 シュンペーターの経済学と社会学」（シュンペーター（2001），1-35 ページ所収）

吉尾博和 2011「シュンペーターの社会経済学と資本主義進化」『千葉大学人文社会科学研究』No. 22，167-82 ページ。